歴史資料館だより

四〇周年をむかえて

ブラジル希望の家福祉協会 副理事長　大野 孔三

四〇周年の式典を終え、一息ついた所ですが、次のイベントに向け走り始めております。私達の福祉の仕事には終わりはありません。

ブラジル希望の家が社会福祉法人として、政府の認可を得て正式に発足したのは一九七〇年一月七日で今年で四〇年を迎えました。今年は四〇周年の年としてイベントを行って来ております。その一番大事な行事が八月二〇、二一日の記念式典でした。二〇日はサンパウロ市議会の主催により開かれ、二一日には希望の家の施設で謝恩焼き肉大会を希望の家を応援されている方たちを招待し、開催いたしました。

また、式典には日本より聖隷学園から堀口路加専務理事、大野和男教諭、生徒の稲垣奏さん、服部証子さん、日本基督教団遠州栄光教会から森田恭一郎主任牧師、秋葉保長老に出席して頂き、立派な式典になり感謝しております。

私達、理事の記念式典は、聖隷グループから派遣された皆様がサンパウロの空港に到着された時より始まりました。いや、もしかすると私の訪日で聖隷の皆様にお会いした時からだと思われます。ブラジル希望の家福祉協会 上村理事長、青山実行委員長はじめ、全理事、心からお待ちしておりました。おかげさまで希望の家四〇周年記念式典は聖隷の皆様の出席で盛大かつ厳粛に行われました。

二〇日の式典では、堀口専務理事の心こもる祝辞が好評で式典出席者の皆様にお褒めの言葉を頂いております。一九日の施設訪問時には、森田主任牧師がお話や園生達と一緒に礼拝を、二一日の式典では挨拶とお祈りをしてくださいました。二〇〇七年度に日本で研修を受けた研究生の内村ミエ・ベアトリスが通訳、竹中チエミ・サンドラが施設内の案内をし、研究成果を見せてくれました。

私事になりますが、日本語とポルトガル語の通訳を務めさせて頂きました。

理事会ではブラジル希望の家の現状説明会で、上村理事長より高齢化、保護者、個人等の寄付が減少し、年々経営が難しくなっていますが、イベント等で全員頑張っていますという発言があり、通訳中感極まり絶句いたしました。通訳者としては失格ですが、いち理事として勘弁してもらいました。私は理事の中では、『強い人』で通っていましたので、皆驚いていましたが、今まで以上に親近感を持っていただけたようです。

聖隷の皆様と四日間・二四時間、ご一緒させて頂き、益々絆が深まり、希望の家は小さいながら同じ道を歩いていると強く感じました。日本とブラジルでは社会、政治、経済等、違いますが、福祉に関係している人々の心は一緒です。聖隷グループの中、希望の家は一番小さな枝かも知れませんが、緑の葉は絶やさず、一生懸命ついて行きますので、今後とも大先輩としてご指導お願い申し上げます。

発行者　聖隷歴史資料館
〒四三三－八五五八
浜松市北区三方原町三四五三
聖隷クリストファー大学二号館二階
TEL　〇五三（四三九）三四〇七
FAX　〇五三（四三九）三三四七

◆聖隷歴史資料館のご案内◆

聖隷歴史資料館の開館時間は、平日一〇時～一七時です。展示をごゆっくりご覧いただけるよう、一六時三〇分までにご入館ください。

休館日は、土・日、祝祭日及び聖隷学園の休業期間とさせていただいておりますが、聖隷集団の各法人・施設の職員、入居者の皆さんは、時間外や休館日であっても入館できます。時間外や休館日に入館を希望される方は、予めお問い合わせください。

◆聖隷歴史資料館展示室・別室のご案内◆

二〇〇七年をもちまして、二〇〇二年から開催されました聖隷グループを構成する各法人の特別展が終了いたしました。

聖隷歴史資料館の常設展示室に隣接した展示室では、特別展でこれまでに制作したパネル・資料を再編集して、一堂に展示しています。展示されている法人は、インド聖隷希望の家、ブラジル希望の家福祉協会、十字の園、小羊学園、牧ノ原やまばと学園、神戸聖隷福祉事業団、日本基督教団遠州栄光教会、聖隷福祉事業団、聖隷学園です。また、同室に設置された「映像コーナー」では、最大一二名まで着席して各法人のオリジナル映像をご覧いただけます。

今年度、聖隷福祉事業団は八〇周年、十字の園は五〇周年、牧の原やまばと学園は四〇周年、ブラジル希望の家は四〇周年を迎えております。

各法人の歴史を振り返ることのできるこちらの展示室にも、この機会にぜひ一度ご来館ください。

断想　聖書の力

「なぜわたしをお見捨てになったのですか」

聖隷学園宗教主任　鈴木　崇巨

「さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。』これは『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』という意味である。」
（マタイ福音書二七・四五―四六）

この聖句は有名な十字架上のイエスの最後の言葉です。「エリ、エリ」は「わが神、わが神」というヘブライ語です。「レマ、サバクタニ」はアラム語で「なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉です。ユダヤ人イエスが日常使っていた言語で、有名な詩編二十二編の冒頭の一句を叫ばれました。

もちろんこれはイエスが「なぜこのような死に方をしなければならないのか」と父なる神に不条理を訴えた言葉や質問ではありません。父なる神もキリストも悲しみと苦痛の極限の一瞬を十字架上で経験されました。父なる神はその愛するひとり子を十字架上に掛けなければなりませんでしたが、その悲しみと苦しみはいかばかりだったことでしょうか。この最後の叫びは御父と御子の一致した苦悶の叫びでした。

「一致した苦悶の叫び」は、聖隷保養農園の草創期の看護人と患者の叫びに似ています。若くして死んでゆく患者が、看護人にまったく受容され、両者の心が一致して、死を受け入れ召されて逝きました。看護人が患者を看取るのではなく、もはや看護人が看取られるような「最後の日々」を送ったと言われています。

事ここに至ってもう看護の領域を越えて、私共のなし得ることは既に終わっていた。彼は毎日の出来事の一つ一つに意義を認め、私共の不行届きも補われ、私共が看とられる日々に変った。
（鈴木唯男
『傷ついた葦を折ることなく』63頁）

人間は自分が家族や看護人から完全に受容されたとき、自分の死を受容するだけでなく、死を超えてゆくことができるのだと思います。この聖句「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という聖句には、父なる神とキリストの間にそのような一致の関係があったことを思わされます。

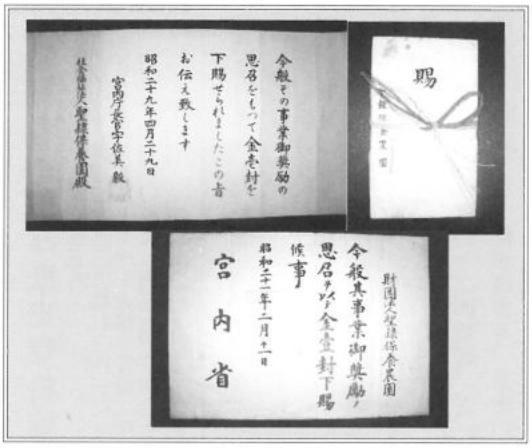
資料庫よりご紹介

聖隷歴史資料館では、聖隷に関する資料の登録・撮影を進めています。その中から、今回はこちらをご紹介します。

「御下賜金の伝達書と熨斗袋」

聖隷歴史資料館の常設展示パネル「激動期」の前には、昭和一四年のクリスマスの日に天皇陛下から頂いた御下賜金の伝達書と熨斗袋が展示されていますが、資料庫には昭和一四年以降に頂いた伝達書と熨斗袋が保管されています。

伝達書は財団法人聖隷保養農園宛ての昭和一八～二七年分と社会福祉法人聖隷保養園宛ての二九年分の合計一一枚、熨斗袋は二枚が残っています。



◇資料寄贈のお願い◇

聖隷歴史資料館では、写真、日記などの資料の受け入れを随時行っています。写真の場合は、写真の画像を取り込んで写真をお返しすることも可能です。お問い合わせは、聖隷歴史資料館（TEL〇五三－四三九－三四〇七）までお願いいたします。

寄贈資料を分析すると、新たな発見がある場合があります。以下は元浜名湖エデンの園・園長、島田愃平氏による分析です。

昔の聖隷社農場の方から、何点かのメモ類を頂いた。その中に戦後のある時期の農場の作付けの地図があった。

イエスの友の会機関紙「火の柱」に、昭和十九年のクリスマス献金に対する長谷川保氏の礼状が載っている。それには敗戦前の聖隷の現状が書かれているが、その中に、『飼育乳牛五頭日々新鮮な牛乳を提供、八群の蜜蜂は集蜜に多忙であり、三町五反歩の畑には本年すでに必要な蔬菜（青物）をはじめ千三百貫の馬鈴薯、六十俵の麦を収穫、素晴らしい天気に恵まれ甘藷はすでに一町五反の植え付けを終了、一万貫の収穫を約束している』とある。

これら農場の働きは、百三十名余の入院患者、百名近い職員家族、空襲で焼け出された教会員などの生活を支えた。裏方の仕事ではあるが、それを裏付けるメモである。

（島田愃平）

お持ちの方は、ご協力をお願いします。

長谷川保聖書研究

マタイによる福音書　第十章五～十節

故・長谷川保氏が行っていた聖書の講義（一九七〇年代後半）には、「マタイによる福音書」、「ルカによる福音書」、「ヨハネによる福音書」、「コリントの信徒への手紙Ⅰ」、「コリントの信徒への手紙Ⅱ」、「ヨハネの手紙Ⅰ」があります。（一部の章、欠落あり）

聖隷歴史資料館では、二〇〇四年度から講義の音声資料を文章に起こしております。二〇〇九年度まで講義内容の文章化が終了していますのは、「マタイによる福音書」（一部の章を除く）です。

今回はその聖書の講義から、聖隷社創業の礼拝の際に読まれた箇所をご紹介します。今後も継続して皆様にご紹介していく予定です。

私どもがこの聖隷福祉事業団の最初でありますベテルホームというものをつくります時に、私どもの生涯の立場といたしまして選んだところでございまして、この聖隷福祉事業団というものは常にこの御言葉の上にたつということになっておるのでございます。

イエスはこの十二人を遣わすにあたり彼らに命じて言われたと。異邦人の道に行くな、またサマリヤ人の町に入るなと。むしろイスラエルの家の失われた人のところに行け。イスラエル人のところ、イスラエルの信仰の失われた、イスラエルの本来の神に選ばれたものでありながら今、神のものとから失われているところの者達、そういう人たちのところ。行って「天国が近づいた」と述べ伝えよ。

この「行って」という言葉。これは聖書のこのキリストが弟子を遣わされるときにおっしゃり、またマタイによる福音書の一番最後二十八章にもこの「行って」という言葉が出てまいります。これは「ポレウォーマイ」と言う言葉でこの言葉は本来旅に出るという意味の言葉でございますが、これはそのままに死ぬという意味がある。同時にまたそれと全く反対の生きる、あるいは生き方をするという意味がございます。ここに私どもが、この「行って」という言葉の深い、深い意味を知るのであります。

そして天国が近づいたと述べ伝えよ。私どものすぐ目の前に迫ってくる。神の御支配が迫っている。心を開いて受け入れなければならないという意味の言葉です。病人を癒し、あらゆる意味で、もう力を全く失ってしまっている人々、そういう人々を治してやりなさい、体で、あるいは精神的にも弱ってしまっている人があるだろう、霊魂が全くもう堕落してしまっている人もあるだろう、そういう人々を力づけなさいという意味の言葉であります。霊的生命を全く失ってしまっているものたちを蘇らせ、キリストの福音を聞いてですね、立ち上がるということが、この死人を甦らせることであります。らい病人を清め、らい病というのは穢れたものと当時はされておって、普通の人間の中に住んではならず、町の外にだけしか住めないものでありましたし、町に行く時には、らい病だ、らい病だと言って、穢れたものだと大きな声で言っていかなければならないと、立法で決められておりました。その世の中からもう全く捨てられておりまする、穢れたものだと考えております人たちを清めなさいと。それを治してやりなさい、看病してやりなさいと。それを愛してやりなさい、大事にしてやりなさいと。またイエス・キリストは自らそれを行なったわけであります。

その次に、ただで受けたのだからただで与えるが良いと。これは当時のラビの教えでありました。それはモーセが神からただで立法を与えられた。そこで立法を教えるときにいわば聖書、日本で今で言えば聖書を教えるときに、その金を貰ってはならんと言うのが当時のラビの教えでございました。それをただで受けたのだからただで与えるが良い。神様からこれだけの恵みをただで頂いた。私どもみなイエス・キリスト、ただで賜っているわけであります。だからただで与えなさいと。報酬をくれというなと。紀元百年ごろにできましたディザケイという教会の手本にする規則でも神の言葉を教えてですね、そして決してその金を貰ってはならない、金を要求してはならないと。金を要求するものは偽預言者であるとされておりました。

私どもも愛の業をし、これらの良き奉仕の業をする時に決して金をくれるからやる、金をくれなければやらないというようなことであってはならない。私どもはただひたすらに神様と人とに仕えるという事を一番常に考えてする。そして与えられる物を「ありがとうございます」と言って受け取るというこの態度がまず根本になくてはならないし、徹底していなければならないわけであります。そうしないと愛の業にはならないですね。キリストはこのことを深く教えました。当時のラビの教えでありましたけれども、同時にキリストもまたそのことを弟子達にしっかりと教えました。

それで、今度は財布の中に金銀または銭を入れて行くなと。旅行のための袋も二枚の下着も靴も杖も持っていくな、働き人がその食物を得るのは当然であると。この働き人がその食物を得るのは当然であるという言葉、この言葉もラビの教えの中にあったわけです。だから専門に神様の御用に従う、御言葉を述べ伝え教会の御用にあたるものは必ず食物を得ると。働く、働き人がその食物を得るのは当然であると。そして財布の中に金銀、または銭を入れて行くなと。これはですね当時タルムードというやっぱりこのラビが教えました、そういう規則がございました。そのタルムードの中にですね、神の神殿に行く時には杖や靴や財布を持って行ってはいけないという、やはり規則があったわけです。その言葉をキリストはひいてきて使ったわけです。

つまり私どもは天地宇宙ことごとくみな神のいますところであり、私どもは神に召されて神様の御用をするという時には神殿に行くのと同じである。それならば財布やあるいは靴や杖を持って行くなと。一物も持たずに行けと。ただ神の御用をする、一物も持たずに行けと、こう教えられた。

この事は私の実体験からいたしまして、真実で、あれがなければいけない、これがなければいけない、あれを持たなければいけない、まずあれが出来ないとこう考えるが、神様の世界はそうではない。無一物ならいよいよ仕事ができる、無一物ほど仕事ができるのであります。

（講義内容より一部抜粋）

聖隷クリストファー中学校 新一年生見学会

昨年度開校した聖隷クリストファー中学校新入生の聖隷歴史資料館見学会が今年度四月九日(金)に行われました。男子一〇名女子一六名の新一年生は、メモを取りながら展示室を回ったり、聖隷学園DVD「隣人愛を育む」を鑑賞しました。

★聖隷歴史資料館にはいろいろなものがたくさん展示してありました。またたくさんの展示物や映像を見て改めて聖隷グループの素晴らしさを感じることができました。

昔、長谷川保さんたちが経営していた小さなクリーニング店から現在の大きくて広い聖隷グループがあるかと思うと、とてもすごいことだと思います。長谷川保さんたちがクリーニング店を経営しているときに当時不治の病として人々から恐れられていた肺結核という病気を患った桑原昇次郎という青年とその父親が訪ねてきました。とても恐れられていた病気だから、普通は断るはずなのに長谷川保さんたちはその人を収容しました。僕は、このことを初めて知ったとき保さんたちはとても心の優しい人だと思いました。

しかし、収容したのはよかったものの、保さんたちは近所の人たちから次々と迫害を受けてしまい、よその場所へ引っ越すことになりました。でも行く先々で結核の患者がいることが分かると迫害を受けてしまいます。しかも当時は日中戦争の最中でした。保さんは患者さんを収容してお世話をする場所を閉鎖しようと考えたそうです。もしここで閉鎖していたら、今僕は聖隷クリストファー中・高等学校にいなかったと思います。しかし、保さんはあきらめなかったことがすごいと思います。その成果が実を結んだのか、保さんたちの働きが天皇陛下に認められ、お金をもらうことができました。

また保さんは看護師不足になったときは看護師養成所を、助産婦不足のときは助産学特別専攻を設立し、看護師、助産婦不足に大いに貢献しました。

聖隷グループの発展には長谷川保さんだけではなく、様々な人によって発展していきました。これは僕も同じで、僕はここまで成長するには、家族や友達、学校の先生などいろいろな人にお世話になりました。これからもお世話になった人々を忘れず大切にして隣人愛も忘れずに、将来は長谷川保さんのように困った人を助けることのできる人間になりたいです。

（泉　孔貴）

★私は今まで聖隷クリストファーの意味を知らなくて、どんな意味だろうと思ったことがありました。「聖隷」はキリストが奴隷の形をとって弟子たちの足を洗った姿から聖隷となって、「クリストファー」は人物の名前で誰よりも重いキリストを川の向こうまで運んだ人を知って驚きました。キリストは、当時奴隷がやる仕事を弟子にやるなんてすごいなと思いました。世の中にはいろいろな考え方をする人がいるなと思いました。

聖隷の創設者、長谷川保さんもみんなとは違う考え方だなと思いました。たくさんの人から避けられていた結核の人たちのお世話をすることは怖い病気に自分もかかってしまうかもしれないのに世話をするなんてすごく勇気が必要だと思います。私ならかわいそうだけど、自分はうつりたくないのでお世話をしようだなんて思わないと思います。長谷川保さんは本当にすごい人だなと思いました。

私も長谷川保さんのように、怖くても勇気を出してどんなことでもチャレンジしていきたいなと思いました。自分のようにあなたの隣人を愛しなさいという言葉を聞いて改めてもっと人に優しく接しようと思いました。

（鈴木　純）

◆刊行物のご案内

「傷ついた葦を折ることなく」
私の生かされた道」
鈴木　唯男　著

今年七月末に歴史資料館にお越しになった鈴木唯男氏は、「何も知らない小僧が神様によって聖隷に運ばれてきた。とてもいい人生を送らせてもらった」としみじみ語られました。

本書は、聖隷社クリーニング店に一七歳で就職し、その後ベテルホーム、聖隷保養農園を経て、ケースワーカーとして働かれた鈴木唯男氏の著書第一号です。

ご自身も結核を経験し、それを生かして作業療法に取り組まれ、時代ごとに具体的なエピソードが綴られた文章からは、当時の病棟の様子、治療方法などを伺い知ることができます。

「神が我々になるべく備え給う時にこれに従ってなし、神がなし給う時にのみ事はなるのであると堅く信じるべきでしょう。まことに有難いことに、神は我々を怠惰で無為になることを許さず、信じる者の内に密かに働きかけ、ある時は我々を駆り立て、ある時は励まし、ある時は慰め、細やかな配慮をもって用い活かし続け給うのである。神はこのように固く捉えて習練の途を歩ませ給う。」

「むすび」の中のこの言葉から、鈴木唯男氏の冒頭の言葉に通じるものを感じました。